

---

# 映し鏡の物語

蜚蜚

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

映し鏡の物語

### 【Nコード】

N0219B

### 【作者名】

蜉蝣

### 【あらすじ】

それは一つの依頼から始まった。暗殺者を生業にするユリナ。修羅の道を追いつ求め、やがて彼女は、人間と魔族との壮絶な戦いに巻き込まれることになる。数々の出会いと別れ。その先にある物とは…。

## 第1話：碧眼の死神

とある盗賊ギルドの地下の酒場。入り口そのものが隠されているせいで、薄暗い店内になかなか入って来る者はいない。

今日もギルドマスターのアルバートは、普段通りいつ来るか分からない客を待っていた。職業柄客が立ち寄る時間帯は、日没後すぐか明け方が圧倒的に多い。彼にとって、深夜は退屈を持て余す時間帯でしか無かった。

ただし、今日はいつもと違う事がある。珍しくカップを磨く彼の横で、挽きたてのコーヒーが香ばしい薫りを漂わせている。大切な客が来る時に出す、彼の自慢のブレンドだ。

酒場とはいいいながら名ばかりなもので、彼がマスターになってからはむしろ喫茶店に近くなっている。常連客からは好評で、仕事前の一杯と言えば必ずここではコーヒーが注文される。

ちよつと深夜を過ぎた頃の事だった。チリン、と扉のベルがなる。客の来た合図だ。アルバートはカップを置き、扉の方を向いた。

扉が開き、客が入って来る。現れたのは妙齡の女性。アルバートの頬が思わずだらしなく緩んだ。この店唯一の女性客だ、無理も無い。

「ハロー、マスター。何かいい依頼来てない？最近小遣い稼ぎみたいな依頼ばっかで退屈なのよ。」

カウンター席はいつも空いている。彼女はためらう事なくアルバートの目の前に座った。微笑んで、いつものね、と彼に注文。他の客がいる時には絶対に見せない、笑顔。それは、彼女の信頼の証だ。

猛禽類を想起させる切れ長の鋭い目。コバルトブルーの瞳は、絶えずどこかをにらんでいる。上下とも質素な革服で、腰のベルトには細身の投擲用ナイフ。両脇には、短剣。

入れたてのコーヒーを待つ物騒な装備の持ち主は、碧眼の死神と呼ばれていた。狙われたら最後、死神のように付きまとう恐ろしい女。アサシン、それが彼女の職業だった。

「使いをよこすなんて珍しいじゃない。大きな仕事でも入ったの？」

「ああ。でかいさ。前金二万、達成はターゲットから直接。」

「へえー、なかなか。ターゲットは？」

「闇剣聖アンジェラ。Sクラスの超大物だよ。うわさでは、最近リアル城塞を包囲していた魔族の大群をたった一日で全滅させたとか。」

「私、Aクラスよ？勝てっこないわ。」

アルバートが鼻で笑った。「冗談だろ、という感じだ。」

「ふん、嘘つけ。この間昇格試験受けていたくせに。それに、ユリナへ指名の依頼だ。」

ばれたかと冒険者カードをユリナはカウンターに出した。カードには彼女の偽名、リサと、大きなSの文字。彼女はニヤツとすると、手のひらを出した。

「しょうがないわね、前金ちょうだい。この仕事請けるわ。たまにはスリルも味わいたい…し！」

ユリナが突然動いた。呆気にとられるアルバートの前で、物陰から一人の男を引きずり出すユリナ。その喉元には、ナイフが鈍く光る。

「こそこそしてたって、気配で分かるわよ。あたしの名前、結構高く売れんのよねえ？三下さん。いくらで売るつもりだったの？」

アルバートと話していたさっきの声からは想像もつかない、どすのきいた声。男は震え上がり、声も出ない。ユリナはおどすように続けた。

「鬼ごっこしない？私が鬼よ。あんたはあたしが数える間に逃げるの。ほら、逃げなさい。」

ユリナが放すと、男は一目散に逃げ出した。

「腰抜けが。まあ、ユリナに睨まれたら仕方ないだろうけどな。いいの？逃がして。」

「三下はこれだから困るわ。ねえ、アル。悪いんだけど用事できちゃった。お金はいいから、次来る時まで取っついて。闇剣聖アンジエラの依頼、終わったら戻るわ。」

「鬼ごっこ、か。怖い鬼さんだ。」

「じゃ、行くわ。またね。」

あいさつもそこそこにユリナは出て行った。鬼ごっこをしに。残されたアルバートは食器の片付けを始める。

鬼が男を捕まえた事が分かったのは、それから数日後の事。男の喉は、鋭利な刃物で切り裂かれていた。男の胸には、メモがピンで留められていたという。

捕まえた、と……………。

## 第2話：ターゲット

ユリナはじつと耐えていた。異常な数の毒蜘蛛と、蛇。思わず悲鳴を上げそうになったが、間違っても声を出すわけにはいかない。なにせ、目と鼻の先にターゲットがいるのだから。

手早く済ませようと、気配を消してゆっくりと近寄る。あと5メートル、4メートル…。

「やめておけ。」

強い口調。アンジエラはこちらを見もせずになんと言った。しかし、そんな事でためらうユリナではない。一気に蹴りをつけようとアンジエラのすぐ隣りに跳んだ。

だが…。

「わっ！」

至近距離からの必殺の一撃を躲し、アンジエラは逆にユリナの手首をとって鮮やかに投げ飛ばした。辛うじて頭を守ったものの、ユリナのダメージはキツイ。起き上がって闘おうとしたが、力が入らなかった。

「やめる。蜘蛛に刺されかねん。私は平気だが、そっちは間違いなく死ぬぞ。」

「あたしだって、毒慣らし位はしてるわ。そんなヤワじゃ、ないわ

よ！」

「やめろ！」

今度のアンジェラの言葉は、紛れも無く蜘蛛に向けられたものだった。アンジェラの体にまわりついていた一匹が、ナイフで切りつけたユリナの右手に落ちた。慣れない相手を蜘蛛は、敵と勘違いして刺す。途端にユリナは激しく苦しみ出した。

焼け付くような激しい痛みが、全身に広がる。ターゲットではなく蜘蛛に殺される自分。

その不甲斐なさを呪いながら、彼女は意識を失った。

目が、覚める。

ユリナはベッドに寝かされていた。蜘蛛に刺された事を思い出し、右手の甲を見る。傷はふさがっていた。それにしても、ここはどこだろうか。

「起きたか、ユリナ。」

唐突に声がした。振り向くと、そこにアンジェラが立っていた。アンジェラが剣を抜き、こちらに来る。鋭い突きを放って来たが、ユリナは避けようともしなかった。アンジェラからは微塵も殺気を感しない。

剣の先はユリナの鼻のスレスレでぴたりと止まった。

「Sクラスのアサシン。さすがだ。」

感心したようにアンジェラは言った。

アンジェラの容姿はなかなかだ。腰まで伸ばした長い髪が、スラリとした長身を引き立てている。小柄なユリナには羨ましい限りだ。旅に向く丈夫な生地 of 服は、古いがきちんと手入れされており、組み合わせのセンスもいい。

「妙な事に気付かんか？ユリナ。」

まだぼんやりしているが、その妙な事にユリナはすぐ気付いた。まだ、名乗って無い！

「何故、私の名前を？」

「双子の姉がいるだろう？ユリアだ。そっくりだからすぐに分かった。ローパスでユリアとパーティを組んでいた事もある。」

ユリア。六年ほど前に姿を消し、その所在は知れない。人さらいにあったということ以外に手掛かりは無く、探しようが無かった。

「姉さん、生きてたんだ。でも何故あんなに殺そうとした私を助けたの？恩を着せるためかしら？」

「他ならぬユリアの頼みだ。人さらいから逃げ出したユリアは、私のいた冒険者ギルドに転がり込んだ。」

追っ手は無論、私と手を合わせて全滅した。ユリアはユリナのいるハーニバイスまで戻りたいと言ったんだが、片道だけで一人五千シ

ルバーかかる。二年かけてやっと金を貯め、ハーニバイスに旅をしたんだが、」

「私は住んでいなかった。私の手掛かりはゼロ。だってアサシンになっただけだから。」

「だがユリアは諦めなかった。私と組んで生計を立てながら、情報を必死に探していたよ。無理のし過ぎで体を壊しちゃった位。」

アンジェラの話はびっくりすることばかりだったが、何故か納得できた。姉は生きている。それも、同じアサシンとして。

聞きたい事は山程あったが、体がまだ回復していなかった。安心したユリナは疲れを感じ、アンジェラの見る前で再び眠りに落ちたのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0219b/>

---

映し鏡の物語

2010年11月5日14時40分発行